

昭和二十七年九月十五日、發行(毎月一回、十五日發行)
昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

(通第四十二号)

慈光

第四卷・第九號

未燈鈔意訳……………(一)

目 法藏比丘の求道……………花田正夫(二)

問題とすべきもの……………中野駿太郎(五)

次 凡禿ノ「ト」(二)……………長岡高人(八)

——否定の論理——

未燈鈔意譯 (第六通)

何よりも去年も今年も、老少男女多くの人々の死にあはれましたことは、まことにいたましいことであります。然し生死無常のことわりは佛がくわしく、かねてかきお説きおき下されてあることでありますから、今更驚くことでもありません。それにつけても大切なことは自分一人一人の往生のことです。先づ親鸞の身について申せば、臨終の善し悪しには用事はありません。佛をひとすぢに信じて微塵も疑ひがなければ現在から正定聚の位に定まると承つて居ります。さうでありますからこそ愚痴の輩、無智の徒もめでたく往生出来るのであります。法然聖人が「佛の御はからひによつて往生する」と人々に仰せられてゐたことは、微塵の間違ひもないことでもあります。親鸞が年来皆さん方に申し上げたことも間違ひのないことであります。どうか学生ものしりになつて學問沙汰をせられないで、芽出度く往生を遂げて下さるやうにと願つて居ります。

今はなき法然聖人が「淨土宗の人は愚者になつて往生す」と仰せられたことを確かに承つて居ります。またそればかり

法藏比丘の求道

旭日が東天に輝く時、夜の闇は破られて光の満ちた天地がひらける。我等が長い迷ひの夜が明けるのは、ひとへに法藏比丘の求道と發願にかかつてゐる。釈尊は靈鷲山上の大無量壽經の会座において、光顔いともかがやく御満悅の姿で、「出世の本懷」を説かれて、法藏の求道と發願を明かにして下されたのである。

遠い遠い昔、錠光如来の出世を始めとして、過去五十三佛が夫々の有縁を度して過ぎ去られたあとに世自在王佛の御出世があつた。

時に國王あり、佛の説法を聞いて、心に悦予を懷き、尋いで無上正眞の道意を發し、國を棄て王を捐てて行じて沙門となる。号して法藏と言ふ。

法藏の誕生をこのやうに佛は説かれてゐる。此処に先づ活目せられることは、法藏は凡夫として人界に出世せられてゐることである。然も國の王として出られてゐる。さて國の王とは人間界において最も勢力のある地位である。我々は毎日朝から晩まで利がほしい、名がほしい、愛を得たいと、前後左右をうろつき廻つてゐるが、さて國の王とはその最大の欲望の満足された地位であるが、そこにも根本的なやすらぎが

でなく、ほんたうに何も知らぬ、あさましい人々が參られたのを聖人が御覽になつて「往生は必定すべし」と申されて微笑して居られたのを拜見して居ります。これと反対に、法文沙汰をしてかしこげに振舞ふ人が參つたのを「往生はどうであらうか」と御心配なされて居たことがあります。聖人にお別れ申してすでに五十餘年も過ぎ去りましたが、今にいたるまで忘れられないで常に思ひあはせられることであります。人々のあれこれと言ふことにだまされないので、御信心がゆるいだり、退転するといふことなしに、御一人御一人芽出度往生して下さるやうにと願つて居ります。ただし人にだまされなくても、信心の定まらぬ人は正定聚に住した人でないから信心のうかれた人でありませぬ。信心が浮動してゐるから、ただまされるといふことも出来てくるのであります。兎角だました人が悪いとばかり思ひ勝てありますが、だまされる人の足元も浮いて居ることを省みなければなりません。

このことは淨信の御房に申上げたことでありますが、この通りにそちらの有縁の人々にも申し伝へて下さい。謹んでし
たゝめませぬ。

元應元年十一月十三日

善信 八十八歳

淨信 御房

花田正夫

見出されず、遂に世自在王佛の説法を聞かれるのである。そして始めて身も心も悦び喜ぶといふ大満足を見出される。

この法藏の御姿こそ、先づ人間に生れて求むべきは眞実の道であると知らせ下さる。眞の道を聞く外に、身も心も慶び悦ぶといふことのあり得ないことを御知らせ下さるのである。

涅槃經において耆婆大臣に導かれて、大懺悔におちた阿闍世王が、釈尊の慈誠を被つて、その微塵もおへだてのない大無辺の佛心に触れて、心大いにひらけ「このよろこびは天界の如何なる楽しみも及びもつかぬことであります」と告白してゐる。父まで殺して王位に即いた阿闍世であるが、さて王位に即けばついで、更に天界の樂を求めて、ちつとも満足といふことは無かつた。そこに善友耆婆の導きで佛道を聞き、始めて大満悅の世界を知らされてゐる。法藏の求道と阿闍世の聞法が全く規を一にしてゐることに驚くのである。

我々は無限の欲求をもつて、現在自分の持つて居ないものを得さへすれば幸福だと考へてゐるが、その願ふものが満たされるとすぐそれはつまらないものとなつて、次の欲求にかり立てられる。喉元すぎる時だけの楽しみを求めて、性こりもなく一生を忙しい忙しいで過し去つて了ふものであるが、

法藏比丘は先づ御身に掛けて我等の行くべき道を示されたのである。

さて法藏比丘は、大いなる悦びの中に、この上もないさとり
の道を求めて、国と王を捨てて沙門となられるのであるが、
佛法で真に捨てると言ふのは、それに執着する心が空ぜられ
ることである。学者が学問を捨てるとは学問に執着する心を
碎かれることである。唯形の上ばかりの捨てるといふのでは
無意義である。然しこの執着の絶たれるのも、佛の説法を聞
き、その教が身心にしみ渡つて大きな悦びとなつて、国をす
て王を捨てるといふことになつてゐる。

親鸞聖人は三界の苦を厭うて真実を求める人々は智者であ
る。愚者は淨土の眞の樂しいことを聞かぬに三界のいと
はしさも知ると愚禿抄で述べられてゐるが、法藏の求道も亦
王佛の説法を聞かれるのが先で、娑婆を厭ひ捨てられるのは
後になつてゐる。是処にも法藏の求道は飽くまで凡夫愚者の
求道の範を垂れて居られる。

抜てこの法藏の国を棄て王を捨てるといふことが、韋提希
夫人の上に最初に現れてゐる。獄中に餓死を待つ夫君ビンバ
シヤラ王を救ふ道もなく、かへつて我子の阿闍世のために宮
中深く幽閉せられた韋提希は、遙かに佛に向ひ御弟子の慰問
を請ひ奉つた時、佛は御自ら韋提の前に立たれた。夫人は佛
の尊容を仰ぐや否や、身の飾りを絶つてゐる。即ち夫人は見
佛の縁にふれて王妃としての位をかなぐり捨てたのである。
明月が中天に耀く時、萬水にその影を宿す。法藏の求道の

が誠め給ふのも、「妄念はもとより凡夫の地體なり、妄念の
ほかに別に心は無きなり、臨終の時までは一向妄念の凡夫に
てあるべきぞと心得て」と源信僧都が御示下されてゐるの
も、又「一切群生海、無始よりこのかた、乃至今日、今時に
至るまで、穢惡汚染にして清淨の心無く虚假、詭偽にして眞
実の心無し」と親鸞聖人が表白せられたのも、清淨眞実の無
碍の光明下での自照の姿である。

以上法藏比丘の自照を根源として一切の往生人の上に顯現
せられることは、佛智の光明に照護せられて自分がすこしで
も立派なものになることではなくして、眞実の光明によつて
いよいよ穢惡の全体が照し出されると云ふことである。

福島先生が「無碍の一道」の題で善財の求道物語を講話し
て下さつたが、その時「華嚴經は佛陀のさとり境界を説か
れたお経であるが、佛のおさとりと云ふものは、自分はこれ
で完成したと言ふ風なものではなく、いよいよこれからだとい
ふ趣がある。その永遠の求道魂の具現者としての善財童子
の求道物語も、荒れ果てた佛の廟所の前に智慧の文殊菩薩が
現れ、集る人々に説法せられて南に去らうとされると、善財
童子が菩薩に迫ひすがつて、私は憍慢を城とし、愛染を濠と
し、愚痴に覆はれ、三毒の煩惱もさかんで、惡魔が私の心の
王として君臨して居ります。どうかこのあさましい身に大悲
を垂れ給うて、眞実の菩薩の道を教へて下さいと告白してゐ
る。文殊菩薩とは佛智である。佛智の前にいよいよ虚仮なる
身を自照せられて、その佛智に導ひかれ護られて天地人生の

月影が、一切往生人の上にかく建現して来るのである。

法藏比丘はここに世自在王佛のみもとに詣でて、ねんごろ
に礼拜して合掌せられながら、佛の御徳を讃仰せられてゐる
光顔巍巍として、威神極りなくまします、かくの如きの儀
明、ともに等しき者なし。日・月・摩尼珠光の熾耀も、皆
ことごとく隠蔽せられて、なほし聚墨の如し。

太陽の照りかがやくころ、提灯も電灯もその光を没するや
うに、ひかりかがやく佛徳の前に一切のひかりと云ふひかり
はことごとく没し去つて了うて、墨のかたまりのやうである
と歎じ給うてゐる。日光とは智慧のひかり、月光とは慈悲のひ
かり、宝珠のひかりとは徳のひかりであらう。暗夜には螢の
ひかりが大きく見えるやうに、佛徳の輝きのない無明の暗夜
には、人間の持つたそれぞれの光がかがやきを見せるが、光
顔巍巍として、御力きはましまさぬ無碍光の前には一切の
光が没し去つて了ふ。

このことは法藏比丘の高才勇哲にして世に超えすぐれ給ふ
ひかりが、佛光に照破せられて、御自ら聚墨の如しと自照せ
られてゐる。

憶ふに親鸞聖人が生涯を「愚禿」と号せられ、智慧第一と
称せられた法然上人が「愚痴の法然房」小釈迦と讃えられた
源信僧都が「頑魯の者」と自称せられる根源が、法藏比丘の
「聚墨の如し」の自照にはじまる。

「淨土の法文は愚者にかへりて信する法なり」と法然上人

一切を善知識と仰いで善財の永遠の求道がはじめられてゐる
これがそのまま念佛往生者の求道の大きな指針である」と教
へられた。

法藏比丘の求道の始りも、善財童子が文殊菩薩の前で告白
せられたと同様なことを世自在王佛の前で告白せられてゐる
そこに報身の彌陀佛がそのまま応身の釈迦佛として我等五濁
の凡愚の身を救済せんと応現遊された尊容を仰ぐのである。

地にひかりはかくて顯現したのである。一切の念佛者の上
にそのひかりは光被せられる。ここに親鸞聖人が、「ひとへ
に彌陀の御催しにあづかりて念佛申すひと」と念佛者にかし
ずかれ、「念佛は非行非善なり、ひとへに他力にして自力を
はなれたるがゆゑに」と讃仰せられ、或は又「自然といふ
は、自はおのづからといふ、行者のはからひにあらすしから
しむといふことばなり、然といふはしからしむといふこと
は、行者のはからひにあらず、如来のちかひてにあるがゆゑ
に。法爾といふ。この法爾は御ちかひなりけるゆゑにすべて
行者のはからひなきをもちて。このゆゑに他力には義なきを
義とすとしるべきなり」と仰せられてゐるのも、法藏の求道
のひかりに照護された念佛成佛の自然の大道への讃仰であ
る。

さて、世自在王佛の前に、自らの聚墨の如き姿を告白せら
れた法藏比丘は、いよいよ深く世自在王佛の身・口・意の三業

にわたつて佛徳を讃歎せられるのであるが、その讃歎の極みにおいて

願くば我作佛せんに、聖法王にひとしく生死を過度して解脱せざるなからん

と、自身の発願を述べられ、最後に世自在王佛と十方の世尊の照覽を請ひ奉つて、御誓のほどを表白せられてゐる。

眞実の讃歎は自然に「願くば我作佛せんに聖法王にひとしからん」といふ作願となる、作願は同時に諸佛照覽の下に誓ひとなつてあらはれるのも自然である。

私は特に最後の御誓のところを心打たれるものがある。

幸に佛信明したまへ、是れ我真証なり

十方の世尊智慧無碍にまします

常にこの尊をして我心行をしらしめむ

たとひ身を諸の苦毒の中におくとも

問題とすべきもの

中野 駿 太郎

二つの心

いつも問題とすべきは自分の心である。その自分の心に二つある。それは煩惱の心と涅槃の心とである。「正信偈」に「不断煩惱得涅槃」とある。「煩惱を断ぜずして涅槃を得

由がある。そのことは後に説くが、とにかくいつでも自分の心はこの煩惱の心か涅槃の心か、どつちかである。それは言ひかえれば、信心があるかないかといふことである。信心のないときは煩惱の心であり、信心のあるときは涅槃の心である。

そこで信心のあるとき、涅槃の心であるときは別に問題はない。問題とされるのは、信仰のないとき、煩惱の心であるときである。禪宗には「萬里一條鉄」といふ言葉がある。

専門的に説明するとむずかしいことになるのであらうが、文字通りに受取つて、すつと一つの信念で貫いて行くと、解釈してもよいかと思ふ。禪宗の悟りが、果してさう行くものかどうかといふことは皇ちがいの私には何とも言へないが、眞宗の信仰の上では、どうもさうは行かないのではないかと思ふ。もつとも私自身の信仰が、まことにささやかなものであるからかも知れないが――。

「若存若亡」。「もしは存し、もしは亡ぶ。といふこれは信仰があつたり消えたりすることを言ふので、善くないことにされてゐる。まつたくそれではしやうがないのであるが、正直のところ私のこころはさういふ状態にある。いけないには違ひないが、どうにもしようがない。否、しやうがないで放任してゐるのではなく、これではいけないと絶えず苦しんでゐるのであるが、かうした状態がもう十数年も続いてゐる。

はじめて佛陀のお慈悲を知らせて頂いて、心の底が抜けた思ひをしてからしばらくの間は、今から考えれば浅いもので

我行は精進にして忍んでついに悔いざらん
前述の阿闍世王が、佛陀矜哀の大悲に浴して「無根の信」をいただくと共に、「若し國中の者が眞に佛道に心ひらけることであれば、阿鼻地獄におちて無量劫の間大苦惱を受けましても苦と思ひませぬ」と世尊の前に言上してゐる。

又親鸞聖人が「たとひ法然上人にすかされ奉りて、念佛して地獄におちたりとも、さらに後悔すべからず候」と関東の同行に告白せられたことをここで特に想ひ浮べる。

阿闍世王は利他の上から述べ、聖人は自信の上から語られてゐるが、自信即教人信、自利即利他、願作佛心即度衆生心で表裏一体である。然も「苦とせず」と言ひ「悔いじ」と言はれる心の底に、「たとひ身を諸の苦毒の中におくとも、我行は精進にして、忍んでついに悔いざらん」との、法藏比丘の誓ひとひとつながりなものを感じ、いよいよ法藏の求道が一切往生人の光源であることを渴仰し奉ることである。

るなり」。だが煩惱と涅槃とは正反対のものである。ところがその正反対のものが、同時に存在するかのやうに説かれてゐるのは一見不思議に思はれるかも知れないが、そこには理

はあつたが、それでも自分は徹底したもののやうに思つてゐた。しかるにその後、次第に心の明暗の度が強くはつきりとして来るやうになつた。禪宗でも「大悟十六番、小悟その数を知らず」などといふ。かの白隠禪師の書かれたものを讀んで見ても、次から次へと悟りの心が碎けて行くことが書かれてゐる。これではいつ徹底されたのかわからぬといふ感じもする。あれほどの人でもさうであつたとすれば、私ごときが悩むのは当然のことと思ふが。それにしても信仰の碎けたときは、心は暗澹たるものになる。

「二つの心」に應じて

頭の切りかへつひいらざる愚癡話を申して恐縮であるがその信仰の碎けて――かういう言い方が善いか悪いかは知らないが――自分の心が煩惱のものになり切つたとき、どうしたらよいか。それはその時その時によつて、いろいろな形で頭の切りかへ、心の切りかへをさせて頂いてゐるのであるが、近角先生のお言葉を聞ひれば信仰の軌道に戻らせて頂いてゐるのであるが、その心が煩惱の境界に陥つたとき、その現実を眺めて、これが凡夫の心であると知ることが肝腎である。今つくづく思はせられつたことである。

もつともさう知つたときは、もうその煩惱の心を客観視してゐるのであるから、信仰の軌道に戻らせて頂いてゐるのであるが、何にしても煩惱の心に陥つたとき、凡夫にはこれよりほかに心はないのだと思ふことが必要である。どなたも御承知の源信僧都の『横川法語』に「妄念はもとより凡夫の地体なり。妄念のほかに別に心はなきなり。臨終の時までは一

向妄念の凡夫にてあるべきぞと「ころえて」とあるのは、まことに千古動かすべからざる鉄案である。

ここで少しく説明に随するやうであるが、はじめに申した二つの心といふことについて一言しておかう。これは今さら申すまでもないことと思ふが、この『横川法語』にもある「一向妄念の凡夫にてあるべきぞと「ころえて」とあるその心得た心は、或る意味において妄念の心ではない。さきに述べた二つの心のうちでは、涅槃の心の部類に入るべきものであらう。

「煩惱を断ぜずして涅槃を得るなり」如何にもその通りである。妄念の心はある。その意味から言へば「煩惱を断ぜず」である。しかし妄念の凡夫と知つた心は、その妄念から、煩惱から離れた別な心である。その心そのものを説明することになると、「涅槃を得るなり」で涅槃の心であると言へることにもなる。ここにややこしいが、一人の人間の心の中に、二つの心があることになる。しかしその凡夫の心を眺める心がなくなつたとき、一つの心だけとなつたとき、それは煩惱を断ぜざる心だけとなる。

いつも二つの心がなければならぬ。それが一つの心だけとなつたとき、心は暗黒となる。
松蔭の暗きは月の光りかな
地上に松蔭が黒々と描き出されるのは、月の光りが皓々と照らしてゐるからである。月が出ないときは、ただ黒一色で

凡 禿 ノ 一 ト (2)

— 否 定 の 論 理 —

凡禿さんの面影と云へば、直ちに脳裡に浮んでくるのは、あの独特の持味のある笑ひ顔と、犀利軽妙な座談とであろう。実に凡禿さんはよく笑ひ、そしてまたよく喋舌つた。だがしかしその饒舌は、決していはゆる一言居士式のなくもがなのおしやべりではなかつた。それは常に相手の心の琴線に触れて、その胸底を貫ぬくだけの鋭さと温かさを持ち、またそれに相応するだけの話術と内容とを持つてゐた。そして黙秘する能はざる時には、縦横自在に弁舌を振つたが、しかし黙過すべき時には、淡々として固執しなかつた。

凡禿さんは、よく瓢の譬話をされた。

「ここに瓢がある。この瓢はいくら振つてみても音がしない音をしなるところをみると、中には酒が一ぱいに入つてゐるか、又は全く空つほかのいづれかであらう。しかし酒の一ぱい入つてゐるのは、栓さへ取ればすぐにとくとくと酒が溢れ出るが空つほの時はいくら栓を取つて見ても何も出ては来ない。

いつもおとなしくして黙つてばかりゐる人は、丁度この瓢

ある。松蔭のなにもわからぬ。それと同様に凡夫の心のどうにもならぬところを見て下さる佛陀のお慈悲が出ぬうちは自分の醜い姿も、見せてもらうことはできない。

平和実現の宗教

平和実現の宗教今日は世界が二つに分れて、相争つてゐる原子爆弾・水素爆弾等の發明されてゐる現代において、もし世界の二つの陣営が、徹底的に戦ふことになつたならばどういふ結果になるか。それこそ人類は、自分が發明した科学によつて自らを破滅に陥れるといふことにならぬとも限らぬ。これも或る意味において、一つの心と一つの心、暗い心と暗い心の衝突であると、言へないこともないであらう。

高山岩男博士は、ラジオの放送に、また或る宗教雑誌に、「共産主義と民主主義との二つの平和主義が争つてゐるが、眞実に宗教の立場からする平和運動であるならば、二つの平和主義に冷水を浴びせかけて、その宗教化、殉教者的熱狂化を冷ますことではなければならぬ」といふ意味のことを述べられたが、至言であると思ふ。そしてその冷水を浴びせかけうる宗教、それはこの二つの心のあることを説く親鸞聖人の宗教がそれであることをさらにもちつと突込んで言えばその宗教の内容を現代に即して、解剖し分析し、丁寧に且つ端的に説かれた近角先生の御提唱がそれであることを、私としては高唱せずにはゐられぬ。

長 岡 高 人

のやうなものだ。それは真に内容の一ぱいに充実した人か、又は全然内容の空つほな人である。そしていつも喋舌りまはつてばかりゐるのは、一杯にもならず、空つほでもない、いはゆる中途半端な人間さ」と。

実に凡禿さんの弁舌は、この酒の一ぱいに入つた瓢の譬の通りで、如來のお慈悲の恵みによつて腹がふくれる喉元まで一ぱいに満ち溢れてゐた何もものが、ちよつとの機に触れて栓が取れば、直ちにとくとくと自然に流露するやうなものであつた。そして口癖のやうに云つてをられたことは「信仰の世界には我慢がなく、従つて疲れることがない」といふ言葉であつた。全く凡禿さんは、一生をあのやうに喋舌り通して、しかも少しも喋り疲れたとも、喋舌り飽いたとも、また喋舌り尽くしたとも想はなかつたことであらう。そしてまたよく種が切れないと思はれる程、そちらからもこちらからも次々に絶え間なく人事相談を持ち込まれてをられた。それだけ凡禿さんは何となく親身な温い感じをもつて法友をひきつける、すぐれた人徳を具備してをられたのである。果してこのやうな徳望の生れた根源は何処から發したものが

それは凡禿さんの次の一文が、明かにその真相を物語つてゐるのである。

「私は、自分の上に満たされぬものを悲しんで泣く。私の満たされぬものが満たされてゐる人を見れば、とても泣いてゐる人とは見えない。泣くのは、私ひとりの満たされぬことに限るやうに思つてゐる。だからなかなか他人様の愚痴を聞き得るだけの餘裕を持ち得ない。そしてみづから狭い世界を作つてゐる。他人様の愚痴は退けながらも、自分の愚痴だけは聞いて貰ひたいとは——何とした矛盾したことであらう。」

今如来慈光の賜により、明かに人のすがたを見させて頂き、貪、瞋、痴の三毒を基礎としての生活であるが故に、満たされてゐると云ふ人のあり得べからざることを知らしめて頂く時に、生きてゐると云ふことと自体が、苦しんでゐることであり、泣いてゐることであるのに氣附かせて頂く。そしてそれによつて始めて、自分に大きな問題を控へてゐながらも、他人様の愚痴をもすなほに聞き得る、広い世界が生れてくる」

かうした凡禿さんの弁舌の微妙な持味は、日常座談の裡に間髪を容れずに、すばりと云ひ切る否定の論理の、小氣味よい切れ味にあつた。その躍如たる面目の一端を示すものとして、遺稿集巻末の「思ひ出」の中に採録されてゐる次のやうな問答を掲げよう。

問「あなたのやうな偉い方、いや有難い方が、もう一人位あつてもよささうですね」

答「御遠慮なく、あなたがおなり下さい。他の人に要求するよりも——」

問「私のやうな者は、ない方がよいと思ひます。周囲に御迷惑ばかりお掛けしますから」

答「どうにもならないことを考へて居られるよりもお念佛を一回でも多く称へることを考へになつたらどうですか」

勿論これは手短かな一問一答のみを抜萃したものであるが、すつぱりと割り切れてゐる無碍自在な凡禿さんの否定の論理の呼吸だけは、ある程度感得出来るであらう。

そして凡禿さんは、その隨筆の中に次のやうなことを云つてをられる。

現実の人々の歩み方を見れば、爪先から踵までを大地につけて歩いてゐる人は、殆んどない。爪先だけで歩いたり踵だけで歩いたりしてゐる。その中で一番面白いのは、頭で歩いてゐる人である。

問「私はどうにもしやうがないから、お詫びすることを考へてゐます」

答「考へてからお詫びするんですか。それでは餘裕がある。私は考へずともお詫びより外に道がありません」

問「近頃さつぱり訳がわからなくなりました。熱心に聞かして頂いた筈の私ですが——」

答「お念佛一つで足りないのか。何なりと足りるものを探したらいいだらう」

問「どんなことが本願で、どこからどこまでか計らひでしようか」

答「いやそう思ふこと全部が計らひです」

問「何日何日にお説教がありますか」

答「聞く氣さへあれば、いつでもあります。聞かなければないと同じです」

問「説教場へも御無沙汰ばかり致しまして——」

答「いやなあなたにあなたが損をしてゐるだけのことです——」

問「点数を上げるために、今日は早く帰りたいと思つてゐます。いつもいつも遅く帰るとすつかり点数が無くなります」

答「ある点数ならば、上げるの、無くするのと云へるけれど、

だから、身には鎧兜をつけて頑城造りであるが、案外脛当てを忘れて、足払ひをかけられると、すぐひつくり返る人が多い。」

実は私が最初に凡禿さんに邂逅した時もまた、全くそれだつた。それは私が若い教員生活をしてゐる頃の事だつた。かねて脊髓カリエスを病んでゐた教へ子の病氣見舞に行つた折、偶然にもそこに居合せた凡禿さんと約二・三十分も話をしたことが契機となつて、この無上の法縁を得させて頂いたことである。が、しかしその頃（昭和九年）二十一才の白面の青年であつた私は、はからずも凡禿さんの自在無礙な弁舌に出遇つて、忽ち完全に參つてしまつたのである。全く唐突と云はうか、無駄と云はうか——凡禿さんは自分の何物なるかを名告るでもなく、直ちに教育問題について核心を衝く鋭い質問をどしどしと浴びせかけて来て、私の生嚼りの教育学の知識を片つ端からひつくり返してしまつたのである。

これには私もすつかり面喰つてしまつた。そして一方には物の見事に根本から足をさらはれてしまつたなといふ敗北感と他方には何とも得体の知れない深いものを内容に持つた本當に肚の出来た人物に出遇つたといふ威圧感を受けた。風彩こそは、隻眼、瘦型で角帯前垂れといふ平凡な商人風ではあるが、どうしてどうしてその筋の通つた鋭い否定の論理

にか、つては、勿論私のひとりよがりの教育的信念などは全然齒の立つ筈はなかつたのである。かうして完全に初対面において度肝を抜かれた私は、しかし何とも知れないある強い力に魅きつけられて、遂に改めて凡禿さんをその自宅に訪問せざるを得なかつたのである。

このやうに相手の当面している人生問題をその弱点を見徹して根底から絶對的に否定しきるといふことは実に大きな精神力である。それは安直に自己を肯定した生活をしてゐる者にとつては、根本的な心の弱味につけ入つてさつと鋭い足払ひをかけて、一言の下に価値感覚をひつくりかへされたことなのである。そして又他人に対して、これだけに徹底した否定の論理を吐ける人は、又それだけに自分自身をも徹底的に否定しきつて、その代りにある絶對的な力によつてその心が明るく満たされてゐなければならぬのである。

「自分の眼で、自分の顔を見た例がない。自分の顔は、鏡によつてはじめて知ることが出来る。もし鏡に映る自分のすがたを疑ふならば、私は永久に自分の顔を知ることが出来ないのだ。」

いかなる人でも、絶對無限に対するとき、そこに出てくる価値は、零である。自分の価値を零としてすべての人に対する時そこに出てくる答は、無限大の力である。」

るところから、種々の無理が生ずる。数学で云へばいはゆる例題の算式の暗記が、すべての人の行き方である。従つて現実の応用問題になると、何をどうしたらよいか、全く手のつけやうがない。これは根本問題である。公式の理解といふことをすつかり忘れてゐるのだ。公式といふものを当面の問題とは全く何の關係もないもの、やうに考へて、ただ目先きの問題さへも片付けば、それで安心なやうな氣持である。

そもそも公式とは何ぞ——即ちありのまゝなる如実のすがたを知ることなのだ。そしてその中から生れる解決法こそが真に徹底的なものにもかゝはらず、膏藥ばかりでその場をこまかすのが、この世のすがたなのだ。だから躓きが起るのが当然だ。

私は、毎日種々の問題で悩んでゐる。しかし煎じつめるとみなその根本はこゝから生れて来ることを知らしめて頂く時に、唯おのが無明に泣くだけだ。世の人々は、そのゆき方を消極的だといふが、決してさうではない。前に進むのには、先づしつかり足もとを見ずに進み得ようか。足もとを見ることは、即ち前に躍進する力の根底を作るのだ。そしてそこにこそ真に積極的大活動の力が生れて来ると信ずる。」

このやうに真実虚仮を明かに判別して、真実をそのまゝそつくり肯定して虚仮をはつきり否定し去る精神力は、実に人

これがいほゆる佛敎の「無」の力であるとは言はれないであらうか。「無」の力は、虚仮に対しては絶對否定の作用となるが、真実に対しては絶對肯定の働きとなる。実に、真実を真実として明らかに肯定する力が、そのまま虚仮を虚仮として鋭く否定する力である。この両面一体の精神力が、信仰の本質から流れ出る中核的なはたらきといふものではあるまいか。

凡禿さんは時々このやうな話をして聞かせられた。

「今、手に一物を握つたとする。さうすると、自分はその一物だけは確に自分のものとして掌中に收め得たけれども、しかし反面ではその他の一切の物は悉くこれを失ひ去つてしまつたことになる。」

ところが今思ひ切つてその握つてゐる手を放せば、掌中の一物は失つてしまふであらうが、しかしその代りに宇宙萬物一切のものが自然法爾にわが掌上に載つてくるのだ」

これは、一見甚だ消極的とも見られる「無」といふ境涯が、実は本質的には無礙自在で積極的な精神力そのものであることを、巧みに説示してゐると思ふのである。

「世の中のすべての問題が千差万別、何一つとして同じものがないのに、何か一つの型で万事を処理して行かうとしてゐ

間至高の自主的判斷力であり、また積極的実践力の根源であると云はなければならぬ。

幸なるかな。今如来の慈光に遇ひ奉り、心の底より湧き出づる歡喜に、かたくなの煩惱の氷いつの間にかやら解け初めてここに心の春を味ふ。人間と生れ来て、この心の春に遇はずして空しくその生を終るは、実に心残りなことかな。

心の春!! そは無量寿の命にして、永遠に生くる道なり。

過去・現在・未来・永劫に限りなき時の間に、芥子粒にも譬へつべきこの世をして、最大の価値あらしむべきは、そもそも何ものぞ。学問か? あらず!! 位階か? あらず!! 金か? あらず!! 健康か? あらず!! 実に心の春に廻り合ふこと唯この一つの道あるのみ。なぜなれば、前者はすべてこれ無常のものなればなり。」

この至高の自覚からおのすからにして生れて来る諦観は、「世間虚仮、唯佛是真」の深い信念であらう。凡禿さんの四十九年の生涯は実に、この「世間は虚仮にして、唯佛のみは真におはします」といふ明るい諦観に徹底したものであつたとはいひ得ないであらうか。凡禿さんの具体的な日常の言動の内面を深く味へば、その一つ一つの根底には、このやうなはつきりした心の明るさが横たはつてゐたことを、今にし

てしみじみと感ぜしめられることを想ふのである。しかも更にこの深い縮観が、お念佛の無礙の一道に帰命することによつて、日常現実の生活をそのものに即して日々体現されていつたところに、鮮かな凡禿さんの個性的な生き方があつたと云はなければなるまい。

実に佛教の本質的なはたらきは、一面この徹底した否定の論理の体現活用にあるとは云へないであらうか。近來の宗派的既成佛教者は、この渾沌たる現実生活に対しては多く傍觀無策であつて、単に世間追従の一方にのみ終始して、その存在の意義が見失はれつつあるといふのが、偽らざる実情であらう。

このやうな佛教の生命力の喪失に対して、これに本来の意義を復活せしめる道は、実にこの徹底した否定の論理の体現にあるのではあるまいか。まさにこの世相混濁の現代においてこそ、その皮相極る現実肯定主義に対して、この高邁な否定の論理が最も徹底的で、しかも最も精彩ある底力を縦横に發揮すべき時でなければなるまい。このやうな観点に立つとき世間的には或は一敗北者とも見られる凡禿さんの生涯といふものが、実はいかなる世の転変にも動されない、佛教信仰の本質的体現そのものであつたと仰がざるを得ないのである。しかも、いかに否定の論理とはいつても、それはいはゆる口頭の観念的な否定論議に止つてゐる限りは、単なる傍觀的

くらあつても、この現実の私にとつては、それは全く縁の遠いことだ。

今、幸にして、この私のすがたをとつくの昔に見透かされて起された佛様のみ教を信心することによつて、淋しいままに明るい生活をさせて頂くことは何ものにも代へられず有り難いことだ。」

ここに群萌の念佛者としての凡禿さんの真生命が生き生きと躍動してゐることを深く想はしめられることである。

貧困と病氣と無知と——これ以外に何ものも持たない私にとつては、実にこの群萌の一人として、凡俗な念佛生活の底に徹して歩まれた凡禿さんの一生こそは、仰ぎてもなほ量りない救ひの光なのである。

昭和二十六年十一月三十日 稿

批評者の立場を一步も脱け出ないものであらう。このやうな念頭のみの理論的思弁から更に鋭くそれをも否定し去つて筆頭一步を進め、自己の全生活をあけて徹底的にその否定の論理の裡に埋没し去つて、なほいささかも悔いがないといふ具體的な信仰者は、実に凡禿さんを措いては、私は直接経験の範圍内にその人を知らないのである。

いや、悔いがないどころか、凡禿さんはそこに人生無上の積極的な法悦を感得してをられたのである。

「私は、遠い深いお話を求める前に、先づ現実の私が生きる道を開きたい。すぐ妥協したがる、そしてすぐごまかしたくなる——このやうな毎日の私の生活をいかに清算すればよいのか。いろいろと立派な教を見聞するけれども、しかし雑念妄想が毎日々々どんどん次ぎつぎに湧き出て来て、自分に手の届きさうなもの一つもない——淋しい!!」

健康第一々の標語を見れば、持病持ちでいくら病院を歩き廻り、薬を湯水のやうに浴びても癒えぬ自分としては、これぐらい無慈悲な言葉はない。それは健康な人や健康になり得る人々にとつては、音楽のやうに快く響くかも知れぬが、到底健康体には縁のない私にとつては、実に無慈悲で冷酷な言葉と響くばかりだ。

金がなければ、首のないのにも劣る々々の言葉もまた、前と同様に感ぜられる。

要するに健康になる道、金持になる道、人格向上の道がい

作者と作品

直 哉

夢殿の救世観世音を見てゐると、その作者といふやうな事は全く浮んで来ない、それは作者といふものからそれが完全に遊離した存在となつてゐるからで、これは又格別な事である。文芸の上で若し私にそんな仕事でも出来ることがあつたら私は勿論それに自分の名などを冠せようとは思はないだらう。

流行と不易

藤 村

俳人に流行と不易の説がある。前者は利那に生きんとするものの姿であり、後者は時の流れのうちに詩の世界を永めて行くものの姿であらう。

この二つを結び合せて始めて詩の完成に近いと考へたものは芭蕉であつたやうに思ふ。

編集後記

彼岸が待たれる残暑でありました。総選挙や教育委員の選挙とははただしきこととであります。独立日本の本来の姿が浮彫りせられることを願つてやみません。再軍備といふことがすでに常識のやうに黙認されてゐる現状であります。父を殺された法然上人が遂に選択本願の大海に恩誓一如の天地を發見せられ、念佛法難の日、幾人が殺され、幾人が流罪せられるといふ大事件の中にも、念佛無碍の一道を歩まれて、微塵も対立的態度をとられなかつたこのことは人類の歴史を照す大きな燈火でありませう。然しこれは一人一人の自覚に待つことで、萬人に強制すべき問題ではありますまい。と言ふのもその根本の力が彌陀佛の願力から直接與へられるといふことでなければ、結局鶉の真似する鳥に終るからであります。トルストイは無抵抗主義を提唱いたしました。無抵抗で終始出来る原動力を説いてゐない処に自らの破滅があります。それでは無抵抗と云ふ消極的抵抗に終り、それも最後の場面に到達するの、もう我慢ならぬといふ修羅場に崩れるのであります。対立的抗争と妥協的融和は相対の人間界に続く悲しい宿業であります。私共といたしましてはそこに唯念佛ひろまれ佛法はれといふことのほか道がないのであります。

▲「問題とすべきもの」は中野駿太郎氏の信境を打ち明けて下さつたもので、求道の永遠性を指して居られます。私は念佛申させて頂くやうになつて廿五年、然し私の内心には未だに迷信的分子が残つて居まして、近親者の大病とか言ふ問題に遭ふと鳥の鳴き声にビクツク心があります。さうした時人間のくせをしなから鳥にびくつくとは何とした愚な、弱い心かと念佛にひきまどされるのであります。さうしたことが見出されるにつけ、異なる歎き、泣く泣く筆を染めて下さつた歎異抄の著者の御悲歎が、私の上に注がれてゐることを深く感じることであります。先生の御住所は東京都千歳局区内、世田谷四の五九〇であります。御不審の方は直接御たづね願ひます。

▲「凡禿ノート」は長岡高入氏の信眼に写る凡禿居士の信徳であります。薄倅の詩人宮沢賢治氏の理想を、同郷の凡禿居士は念佛の独り働きの中に実践せられてゐると直感申すのは私一人でせうか。

「信心定得の人は佛より言はしめられるあひだ人が聞いて信をとる」との蓮師の念佛者讃仰の言葉を生きて拜することでありました。長岡氏は盛岡市鹿島下四の三であります。

▲「法蔵比丘の求道」は私の大經の統経餘感であります比丘とは未だ菩薩と成り給はぬ始めの名であります。凡夫の姿を現せられてゐる時の求道であります。

慈光 第四卷第九号 昭和二十七年九月十五日 発行
 昭和二十四年七月二十三日 第三種郵便物認可

昭和二十七年九月十日 印刷 昭和二十七年九月十五日 発行 毎月一回十五日発行	定価 一年金二百円(郵税共) 半年金拾七円(郵税共) 一年金二百円(郵税共)	名古屋市南区匠上町二ノ二八 編集兼 花田正夫 発行人 名古屋市千種区千種町馬走二八 印刷人 本田政雄 名古屋市千種区千種町馬走二八 印刷所 千草印刷所 名古屋市南区匠上町二ノ二八 一 道 会 館 発行所 慈光社 振替口座番号 名古屋一〇四七〇番
--	---	--